



# 朝日子だより

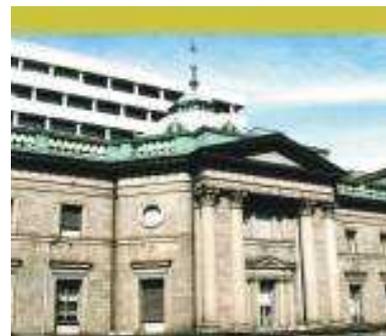
吉高生のみなさんへ

社会人の視点から、仕事内容や、社会人として必要とされる資質について書きました。進路を考える際の参考になれば幸いです。

土屋 宰貴（平成10年度 普通科卒業）

日本銀行 調査統計局 経済分析担当

東京工業大学 大学院 理工学研究科 数学専攻 修了



*Bank of Japan*

日本銀行

仕事内容は・・・

**入**行して5年が経ちました。私が携わった仕事は、会社の業務全体からみれば、ほんの一部に過ぎませんが、紹介させていただきます。これまで、大きく分けて、3つの仕事に携わりました。

まず、入社直後の本店での研修を経て、松本支店で1年間、支店勤務を経験しました。支店では主に、地域経済の調査・分析を行いました。調査・分析と聞くと、デスクワークのように感じる人もいるかもしれませんが、実際には、企業の方に直接会って情報収集することが必要不可欠です。先方の担当者は、企業の中核となっているポジションの方が多く、私のような社会人になったばかり

の若輩には、会って話をする機会は作ってもらえても、はじめのうちは、生の声や本音をそう容易く話してはくれませんでした。そのため、こちらからも、先方に有益だと思ってもらえるような情報提供を行うことで、対等な関係になれるよう、必死に努力をしたことを覚えています。このようにして得た情報などを基にした地域経済動向の調査・分析結果は、毎月、メディアやHPを通して公表を行いました。また、こうした定例的な報告以外に、3回ほど、特定のテーマについてレポ

ートを作成して公表をする機会を得ましたが、そのときは、地元の新聞紙などにかなり大きく扱われ、身が引き締まりました。



**次**に、本店に戻り、「短観（全国企業短期経済観測調査）」と呼ばれる統計の作成及び企画立案に関わることになりました。「短観」公表は、日本銀行の数ある仕事の中でも、

もっとも注目度が高いものの1つで、公表のたびに、その直後のニュースや夕刊の一面、翌日の新聞に大きく取り上げられるなど、株式市場など金融市場に対して強い影響力を持つものです。この部署に来るまでは、単に企業にアンケートに回答してもらって、集計・公表しているだけの決まりきった仕事だと思っていました。しかし実際には、統計精度の設



定 企業の選定 協力依頼 実際の調査（送付・回収・審査） 集計・公表 統計作成方法や統計精度の見直し という膨大かつ複雑な作業が待っていました。在籍中は多くの労働投入を必要としましたが、社会の関心が高いものでもあり、責任感を持って最後まで積極的に取り組むことができたと考えています。

**現**在は、経済分析担当という部署に所属しています。ここでの基本業務は、国内の経済および財政に関連する理論・実証分析を行い、その成果を総裁を含めた役員へ報告することで、日本銀行の情勢判断、ひいては政策判断に役立てることにあります。高校生はあまり実感が無いかもしれませんが、世間では今、「100年に1度の不況」と言われる状況にあり、国内経済は大幅に悪化しています。こうした中、テレビや新聞では、不況の程度や回復のタイミングばかりに注目が集まりますが（もちろん、それらは非常に重要です）、その先にある、回復期における目標とすべき方向性を探ることも仕事の1つです。決して容易な仕事ではありませんが、だからこそ、やり甲斐を感じています。



**こ**うしてみると、幸運に恵まれたのか、ミクロ調査から統計作成、そしてマクロ分析と、非常にバランスよく、調査・分析の仕事に携われました。しかし、冒頭の通り、これらは会社の業務全体からみると、非常に限られたものに過ぎません。今後は、金融システムの安定化や金融調節に関する業務など、これまでの経験とは少し色合いを変えた仕事にも挑戦してみたいと考えています。

## 職場の様子

**談**論風発、という言葉がぴったりと当てはまる職場だと思います。分野を限定せず、また色眼鏡で見ることも無く、自由に物事を論じ合えます。そのようにして特段目的もなく始めた議論の中からであっても、何らかの意味合いを導き出そうとするところは、当行ならではの印象ではないかと思っています。

## 就職前と就職後の印象の差は・・・

**人**行する前は、もっと型にはまった仕事が多いものだと考えていました。しかし、実際は想像とは異なるものでした。例えば、少し前までいた統計作成部署では、最終的な統計の作成・公表という目的は変わらなくとも、そこに至るまでのプロセスは、常に変化していました。かなり昔から受け継がれてきた手法であっても、改善点や合理的な代替手法を思いつけば、新入社員であっても自由に提案でき、検証した結果、実際に優位性があれば、すぐに採用されます。現在の分析部署でも、テーマやその分析手法も、かなりの程度裁量が認められています。社会人はデリーワークが多くを占めると考えていた私にとっては、良い意味で違った印象を与えられました。



大岡山キャンパス百年記念館

東京工業大学 大岡山キャンパス

# 私

が考える学生と社会人の最大の違いは、「人との関わり」という点です。学生的时候は、自分と関わりある面子と言え、クラスメイトや部活、サークル、アルバイト関係がほとんどで、それ以外に交友が広くても、接する人たちは大抵、同世代や自分と共通の考えを持っている人に限定されることが多いと思います。たとえそうではない人が周りにいたとしても、その数は限定されているのではないのでしょうか。少なくとも私の場合はそうでした…。しかし、社会人に入ると、状況は大きく変化します。これまでじっくりと話をする機会なんてほとんど無かったような年輩や、TVや本で見かけるような高名な方から、話を理解しようとさえしてくれない人やこちらの話の穴を常に狙っている人まで、実に様々な人たちとの間で、機動的な交渉や合意形成が求められます。こうした要請が数多くあることや、それに的確かつ機敏に応えていくことは、社会人ならではの醍醐味と言えるのではないのでしょうか。

## いま役に立っていると感じる高校時代の経験

# 高

校や大学時代の経験で、現在の仕事や生活に役立っていると感じるのは大きく次の2点です。

第一に、勉強スタイルが確立できたことです。ここでいう勉強とは、単なるペーパーテスト対策という意味だけではなく、分からないことがあったときに、それをどのようなステップでクリアしていけば良いのかをイメージ付けできることを指しています。まず、何が分からないのかを明確にし、次に、それを理解するためにはどのようにすればよいか考え、それを出発点に試行錯誤してみる。最後にクリアできたか丁寧に検証し、余裕があれば、体系立てた整理を行う。こうした意味で、勉強とは、学生時代だけではなく、社会人になってからも強く求められるものだと感じています。



# 第

二に、行事や日々の課題を通して、精神的にも肉体的にも鍛えられたことです。高校のときに、屋上での応援練習や五合目までの富士山強歩大会、毎日繰り返されるテストなど、決して

自発的には出来ないような、苦しさを含む行事を経験できたことは、どこかで常に自分を下支えしてくれているような気がします。大学時代は、研究のために、1～2年ほど、日曜の終電で通学し土曜の午後に帰宅する（床にゴザを敷いて寝て、体育館のシャワーを利用する）という、狂気染みた生活を送っていましたが、このような生活が可能だったのも振り返ってみれば、高校時代の日々の経験が根底にあったからだ、卒業後10年を経た今、強く感じています。

